

# 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり 地域連続型研修」とその効果

—ケア環境・研修参加者の意識・利用者の行動に及ぼす影響の評価—

児 玉 桂 子 ・ 古 賀 誉 章 ・ 沼 田 恭 子  
鈴 木 みな子 ・ 廣 瀬 圭 子

## Effectiveness of a “local continuing professional development (CPD) program on the creation of institutional environments supportive of elderly people with dementia” : Evaluation of impact on care environments, awareness among training participants and user behavior

Keiko Kodama ・ Takaaki Koga ・ Kyoko Numata  
Minako Suzuki ・ Keiko Hirose

**Abstract:** A “local continuing professional development (CPD) program on the creation of institutional environments supportive of elderly people with dementia” for staff from a number of care establishments in one district was implemented. This program comprised 6 months of off-the-job training regarding the acquisition of knowledge and skills concerning the creation of institutional environments supportive of people with dementia, alongside training to actually create such an environment in their own establishments. The effects of this training on the care environment, the behavior of elderly people and staff awareness in each of the establishments were then clarified. A total of 16 care staff working in special nursing homes for the elderly and day service centers participated in the training, and environments were created that were enriched in terms of both physical environmental aspects and social environmental aspects. Pre- and post-training comparison using PEAP showed that improvements to create an appropriate environment for elderly people with dementia were being implemented after the training. Observation of the behavior of elderly people after creating the environment showed positive effects such as greater serenity and closer relations. Self-evaluation with regard to the training revealed that participants had not only acquired knowledge and skills related to the care environment, but had also widened their perspectives on the influence exerted by environment creation on elderly people. Training in institutional environment creation is not only a program that contributes to the acquisition of knowledge and skills, but extends to the process of evaluation of effects in the practice of environment creation.

**Keywords:** Training for the creation of institutional environments supportive of elderly people with dementia, Guidelines on Environmental Support for Elderly Dementia (PEAP Japanese Version), Local continuing professional development, Evaluation of the effect of training

同一区内にある複数の介護事業所の職員を対象に、6か月の期間に施設外研修により認知症に配慮した施設環境づくりの知識やスキルの習得、それに基づき自施設で施設環境づくりの実践を行う「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり地域連続型研修」を実施して、この研修が各施設のケア環境、高齢者の行動、職員の意識へ及ぼす影響を明らかにした。研修には特別養護老人ホームやデイサービスに勤務する介護職員16名が参加して、物理的環境と社会的環境の両面から豊かな環境づくりが行われた。PEAPにより研修の前後を比較すると、研修後には認知症高齢者にふさわしい環境へと改善が行われた。環境づくり後の高齢者の行動観察では、落ち着きやかなじみの関係の増加などポジティブな影響がみられた。研修への自己評価では、ケア環境に関する知識やスキルの習得のみでなく、環境づくりが高齢者に及ぼす影響へと視点が広がったことが示された。施設環境づくり研修は、知識やスキルの習得に留まらず、環境づくり実践の効果の検証のプロセスまで含んだ研修プログラムである。

**キーワード：**認知症高齢者に配慮した施設環境づくり研修、認知症高齢者への環境支援指針 PEAP、地域連続型研修、効果検証型研修

## I. 研究の意義と目的

### 1. 認知症ケアの向上に向けた研修の必要性

2012年8月の厚生労働省の推計では、認知症高齢者数は300万人を超え、要介護認定を受けた高齢者の過半数に達し、さらに特別養護老人ホームなど介護保険3施設の入居者の9割以上を認知症が占める状況にある。従来の身体的ケアのみでなく、認知症ケアを標準と位置づけた新たなケアモデルの確立により、高齢者ケア全体の水準向上を図ることを「2015年の高齢者介護（厚生労働省、2006）」は提言している<sup>1)</sup>。それにもかかわらず重症化により施設や病院への入所傾向が強いことに対して、医療と介護の連携強化により地域の中で本人の意志を尊重した生活支援へと舵を大きく切る必要性を「今後の認知症施策の方向性について（厚生労働省、2012）」では強く打ち出している<sup>2)</sup>。

これらの提言の中で、認知症への高度な知識とスキル、医療・介護領域を包括した総合的な生活支援等を実践できるカリキュラムの開発と教育・研修体系の必要性がセットとして提案されている。これらの教育・研修は認知症ケアの向上に必要なだけでなく、介護職員の専門性向上や実績に対応したキャリアパスの実現にも欠かすことができない。

わが国における代表的な認知症ケア向上に向けた研修は、「認知症介護実践者等養成事業（厚生労働省通知、2006）」であり、これは2001年から実施されてきた「痴呆介護実務者研修基礎課程・専門課程」を引き継いだものである。この養成事業では、認知症介護実践者研修（講義・演習36時間＋実習4週間以上）・同リーダー研修（講義・演習57時間＋実習4週間以上）・同指導者研修（講義・演習200時間＋実習4週間）とステップアップしていく充実した内容となっている<sup>3-4)</sup>。認知症介護実践者等養成事業のカリキュラムは、認知症理解にもとづく実践のために、医学、介護、心理、居住環境、地域連携、権利擁護、組織論、人材育成、実習など多様な内容から構成されている。

認知症ケアに関する政策の進展のなかには、大規模な従来型施設環境から家庭的な雰囲気の

ユニットケアやグループホームへの転換が位置づけられ、居住環境の重要性が認識されている。しかし、研修カリキュラムでは、環境に向けられる時間はわずかであり、例えば認知症介護実践者研修では、居住環境に関する講義と演習は4時間程度である。ハードウェアとしての居住環境の役割への理解は進んだが、ケアの質や認知症高齢者の行動への重要な影響要因としての環境への認識はまだ十分とはいえない。

## 2. 本研究の目的

「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム(以下施設環境づくりプログラム)」は、ケア環境を構成する建築などの「物理的環境」、ケアによる関わりなどの「社会的環境」、運営方針など「運営的環境」の3つの側面を視野に入れ、まず目に見える物理的環境の改善に着手することにより、職員の意識やケアを変え、高齢者の暮らしの向上を目的とする体系的なプログラムである<sup>5)</sup>。

このプログラムは、これまでに個々の施設における施設内実践として行われ、施設の物理的・社会的環境の改善や認知症高齢者の行動の改善に成果を上げてきた<sup>6-9)</sup>。この施設環境づくり実践は、個々の施設の事情に沿った取り組みが可能であるが、一方で施設環境づくり実践マニュアルや環境づくり支援専門組織の支援があったとしても成果にばらつきが生じる場合もみられる<sup>10)</sup>。

A区内の介護事業所の職員を対象に、施設外研修として施設環境づくりの知識とスキルの習得を行いつつ自施設で環境づくり実践を行うという、地域をベースとした連続的な研修を計画した。6か月の期間、A区内の異なる介護事業所から集まる参加者に対して「施設環境づくり地域連続型研修」を実施して、この研修が各施設のケア環境、認知症高齢者の行動、職員の意識にどのような影響を及ぼすかを明らかにすること、さらにこのような効果検証型研修の必要性を示すことが本研究の目的である。

## II. 研究の方法

### 1. 「施設環境づくり地域連続型研修」のプログラム構成

#### (1) 研修プログラムの構成

ベースとなる施設環境づくりプログラムは、ケアと環境への気づきを高める(Step1)、環境課題の抽出と目標設定(Step2)、環境づくりの計画立案(Step3)、環境づくりの実施(Step4)、新しい環境を暮らしとケアに活用(Step5)、環境づくりの評価(Step6)から構成される。「施設環境づくり地域連続型研修」では、6か月の期間に6ステップに沿った知識とスキルの習得と平行して自施設で環境づくりの実践を行い、その約3か月後にフォローアップ研修を位置づけている(表1)。

第1回研修では、「認知症高齢者への環境支援指針(PEAP日本版3)」を用いて、認知症ケアと環境の関わりについて学習を行う。「PEAP日本版3」は、認知症高齢者のケアと環境に必要な8次元から構成され、環境づくり全体を通じて共通の視点と位置づけている。第1回研

表1 地域連続型施設環境づくり研修の構成

研修目標 プログラムのSTEP	構 成 内 容	使用したツール・資料
第1回 2011年9月7日 認知症ケアと環境の視点を学ぶ STEP1～2	○施設環境づくりプログラムの概要 ○認知症高齢者への環境支援指針 PEAP に基づくケアと環境のとらえ方 ○●キャプション評価法の考え方と活用法 ○前年度の研修における実践事例の紹介 ◎自施設環境の紹介と研修で取り組みたいこと ☆自施設環境のキャプション評価	・施設環境づくり実践マニュアル ・パワーポイント（PP） ・キャプション用紙とワークシート ・前年度の実践事例一覧 ・研修で取り組みたい場所
第2回 2011年10月5日 環境づくり実践施設見学	○□特別養護老人ホームにおける環境づくりの実践 ○施設環境づくり支援プログラムによる環境づくりの幅広い効果 ○ケア環境のインテリア 提出：自施設環境のキャプションカード	・環境づくり実践のPP ・環境づくりの効果のPP ・ケア環境のインテリアのPP
第3回 2011年11月2日 施設環境づくりの手法を学ぶ環境づくりのグループワーク STEP2～3	●◎キャプションカードを整理し、環境づくりの課題抽出 ○入所・通所各施設の役割と環境づくりの考え方 ◎環境づくりのグループワーク（目標設定・暮らし方シミュレーション・環境づくりのアイデア出しまで行う）	・各自のキャプションカード ・提出されたキャプションの一覧表 ・目標設定シート ・暮らし方シミュレーションシート ・環境づくりアイデアシート
第4回 2011年12月7日 自施設に環境づくりの手法を適用 STEP2～3、STEP4の一部	●各自が自施設の環境づくり演習に取り組む ◎グループの中で発表をして、意見交換 ●環境づくり実践するアイデアを絞り、実施方法の検討シートに記入 ☆環境づくりアイデアのベスト3を実施方法の検討シートに記入 ☆ 自施設で環境づくりの実践を始める	・上記と同様のシート ・実施方法の検討シート
第5回 2012年1月25日 環境づくりの実践事例検討 環境づくりをケアに活かす方法を学ぶ STEP5～6	◎実施方法の検討シートに基づき各自の環境づくりの事例検討 ○「STEP5 新しい環境を暮らしとケアに活かす」の説明 ○「STEP6 環境づくりを振り返る」の説明と各種シートの活用法 ○環境づくり事例の紹介（特養とデイサービスの事例） ☆自施設で環境づくりの実践を継続、各種シートへの記入	・上記の各自の施設での取り組みに関するシート、それらの一覧表 ・環境づくり振り返りシート ・環境づくりの効果の調査表 ・環境づくりの事例のPP
第6回 2012年2月29日 環境づくりの実践事例検討 環境づくりの評価を学ぶ STEP6	◎各自の環境づくりの事例報告と講評 「環境づくり振り返りシート」と「利用者への環境づくりの効果の調査表」を事前に事務局に提出、これらに基づく発表 ☆自施設で環境づくりの実践を継続	・環境づくり振り返りシート ・環境づくりの効果の調査表 ・環境づくり実践例の写真
フォローアップ研修 2012年7月4日 環境づくりの事例検討 環境づくりの継続のために	◎各自の環境づくりの4か月後の事例検報告と講評 ○施設環境づくりがもたらす大きな効果－環境・ケア・暮らしを変える ○環境づくりのための組織づくり－参加と継続を目指して	・4か月後の上記資料提出 ・講義資料の配付

凡例：施設外研修として実施（ ○講義 ●演習 ◎グループワーク □見学 ）  
施設内研修として実施（ ☆自施設で環境づくりの実践 ）

修では、施設環境の課題を把握する手法である「キャプション評価法」の考え方と活用法も学び、自施設環境のキャプション評価の実施が宿題となる。

第2回研修は、環境づくり実施施設において担当職員の講義と見学が行われる。施設環境への気づきが高まったところで、色彩や家具配置などケア環境のインテリアについての講義が行われる。

第3～4回は、自施設のキャプションカードを整理して環境課題を明らかにし、環境づくりの目標設定、新たな環境下での暮らし方のシミュレーション、それを実現する環境づくりのアイデア創出の演習が行われる。第3回の研修はグループワークで行い、第4回にその手法を自施設に適用する。第4回以降、自施設で何らかの環境を変えていく実践が進められる。

第5～6回には、新たな環境を暮らしとケアに活用する方法と環境づくりの評価法の講義が行われる。環境の活用法として、新たな環境を積極的に暮らしに活かす方法とさらに環境づくりをケアプランに反映することが取り上げられる。環境づくりの評価法としては、「環境づくり振り返りシート」と「利用者への環境づくりの効果の調査表」が研修に取り入れられている。第6回研修会では、自施設での環境づくり実践やその効果をこの2つのシートで整理して報告を行い、講師から講評が行われる。

6回の研修時点ではまだ利用者への影響が十分つかめない場合もあるので、約3ヶ月間調整を行いながら実践を続けて、その報告を行うのがフォローアップ研修である。年度が変わることもあり、フォローアップ研修への参加は任意となっている。

以上のように本プログラムは、環境づくりの視点や課題を明確にできる多彩なツールから構成され、単なるスキルの習得のみでなく、プログラムの効果の検証のプロセスまで含んでいることが特徴といえる。

## （2）本論文の分析で取り上げたツールの概要

「認知症高齢者への環境支援指針（PEAP 日本版3）」は、①見当識への環境支援、②機能的な能力への環境支援、③環境における刺激の質と調整、④安全と安心への配慮、⑤生活の継続性への環境支援、⑥自己選択への環境支援、⑦プライバシーの確保、⑧ふれあいの促進の8つの次元とその内容を具体的に示す中項目や小項目から構成され、6ステップの施設環境づくり全体を通じての共通の視点と位置づけられている。

「キャプション評価法」は、施設内外の良い、または問題だと感じた場所を写真に撮り、その写真と簡単なコメント（キャプションと呼ぶ）を1枚のカードにまとめる。それにより、施設の環境課題を可視化して、環境づくり参加者で共有するための方法である。

「環境づくり振り返りシート」は、施設環境づくりのステップ6において、これまでの取り組みのプロセスをコンパクトにまとめて、効果や課題を明らかにする目的で使われる。環境づくりに沿って、①キャプション評価等による環境の課題、②環境づくりでの暮らしのイメージ、③環境づくりの目標、④環境づくりのアイデア、⑤環境づくりの内容、⑥PEAPによる環境づくり前後の評価、⑦活用の状況が記録される。

「利用者への環境づくりの効果の調査表」は、環境づくりを行った環境を使う個々の利用者への影響を観察するためのシートである。内容は、「落ち着いて過ごすようになった」、「居場



所を選択して過ごせるようになった」等の高齢者への影響に関する10項目と「ご家族の訪問が増えた」等の家族に関する3項目から構成される。

## 2. 実施方法と参加者の概要

研修は主催者である介護人材研修機関と環境づくり支援専門組織の協力により実施された。介護人材研修機関は、A区内の介護事業所に勤務する職員に対して研修希望者の募集、会場や機材の準備、資料の準備などきめ細かく円滑な研修に努め、環境づくり支援専門組織はプログラムの提供や研修の実施を行った。環境づくり支援専門組織のメンバーは、福祉環境、建築設計、環境心理、高齢福祉をバックグラウンドとする4名が担当した。

第1～6回の参加者は16名（男性3名・女性13名）であり、全員が介護スタッフであった。施設種別は、特別養護老人ホーム（以下特養）8名、老人保健施設（以下老健）2名、デイサービス（以下デイ）5名、小規模多機能施設（以下小規模）1名であった。参加者の介護福祉士としての経験は、3年未満から10年以上と幅が広い。職種は限定されないが、今回は全員が介護職であった。

フォローアップ研修参加者は、このうちから13名であった。施設種別は、特養6名、老健2名、デイ5名である。フォローアップ研修参加者の施設内における環境づくりの経験は、4名が施設で実施中、3名が過去に実施であり、環境づくりの経験のあるものが半数に達した。

研修参加者が決定した後に、介護人材研修機関は参加施設の管理職に対して、施設環境づくり研修の効果や施設全体で取り組むように協力の依頼状を出した。その結果、フォローアップ研修参加者をみると、13名中11名が施設の協力を得られたと回答した。

研修は2011年9月から2012年2月まで、毎月1回4時間実施した。研修テキストとして、「PEAPにもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル」と「CD版認知症高齢者に配慮した施設環境づくり実践マニュアル」を使用した<sup>5) 11)</sup>。研修費用はA区の補助により無料であり、研修終了後には参加者個人に対して修了証書が出された。

なお、研修成果の使用許可を文書で行い、介護人材研修機関、研修に参加した施設の管理者、研修参加者より得ている。

## Ⅲ. 結果

### 1. キャプション評価の内容

研修参加者は自施設の良いと思うところや問題だと感じるものの写真とキャプションを1枚のカードにして、第2回研修で提出した。16名の作成したキャプションカード枚数は合計232枚であり、一人当たりの枚数は3枚から63枚と幅があった。最小値と最大値を除いた一人当たり平均枚数は11.9枚であった。

キャプションカードの45.3%がその後の環境づくり実践と関連する場所を取り上げ、利用者の暮らしやケアの質に関わる内容が多く見られた。一方、施設スタッフの協力を得た研修参加者は多数のキャプションカードを作成してきたが、その内容は整理整頓や壁の汚れなど利用

者の生活の質に直接影響しないものも見られた。しかし、環境づくりを協力して進める契機として、たいへん意味があった。以上のように、環境づくりのベースになる環境課題の抽出は、適切に行われていたといえる。

## 2. 施設環境づくりの実践事例の特徴

第6回とフォローアップ研修では、環境づくりのプロセスと効果をコンパクトに「環境づくり振り返りシート」に整理をして、提出された。第6回の研修では、31枚の振り返りシートが、フォローアップ研修では19枚のシートが提出され、これを表2と表3に整理した。

### (1) 実施場所からみる環境づくりの特徴

表2には主に特養や老健などで実施された環境づくりが、整理されている。最もよく取り上げられたのは廊下であり、利用者や家族がくつろげる居場所づくり、ミニコンサートなど多様な活動ができる環境づくり、わかりやすく楽しい掲示物の工夫が行われた。浴室・脱衣室については、プライバシー、安全、自立を確保した浴室や洗面の環境づくりに取り組まれた。トイレに関しては、扉を開けた時に丸見えにならないプライバシーの確保や分かりやすいサインに取り組まれた。食堂については、落ち着いてくつろげる環境づくりが行われた。屋外に関しては、きれいな花を植えて、見て楽しめるベランダの環境が整えられた。このようなパブリックスペースに加えて、プライベートスペースについても殺風景な居室や看取りのための静養室を潤いのあるものにする環境づくりが行われた。

表3は、デイサービスの職員によるデイルームの取り組みである。デイサービスの利用者は自立度の高い方から虚弱な方まで幅が広く、環境づくりに求められる内容も多様となる。広いデイルームを目的に合わせて、①くつろげる居場所づくり、②趣味活動などの活動の場づくり、③プライバシーが確保された静養スペースの確保、④持ち物の管理が円滑にできる送迎スペース、⑤雑多となっている物品整理や、杖を保持する杖置きを作成による安全確保も行われた。

以上のように今回の環境づくりの場所やその内容は、大変多様性に富み豊であるといえる。

### (2) 環境づくりの改善手法から見た特徴

環境づくりは物理的環境と社会的環境に関わる取り組みに分けることができる(表2、表3)。物理的環境の改善手法は、①家具の配置換えなどによる部屋の模様替え、②杖置きや滑り止めマットなど物品の購入や作成、③カーテンやロールカーテンなどインテリアの活用、④パーティションの固定、本棚や収納を使いやすくする等の工夫、⑤廊下の展示やタピストリー、写真等の掲示物の活用、⑥花や緑の活用など小規模なものが大部分を占めたが、⑦浴室機器の配置換えなど大掛かりなものもみられた。

環境づくりを活かすためのケア面からの改善の取り組みとして、①職員でおやつや音楽の提供の仕方の工夫、②浴室機器の活用方法の説明書作成、③職員や利用者へ新たな環境の周知、④入浴委員会との協力、⑤介護サポーターやボランティアの活用、⑥家族に掲示用の写真を依頼、⑦ベランダの園芸へ利用者の参加など、環境づくりへの情報の収集や活用にあたって幅広い工夫が行われた。

以上のように今回の研修では、物理的環境づくりのみでなく、それを活かすためにケアの面

表2 施設環境づくり研修の実践事例の内容と活用状況（1）

場所	事例 No	課 題	環境づくりの目標	環境づくりの内容*1	環境づくりの活用
食堂	老健 15	食事席のそばにトイレがあり落ち着かない	プライバシーが守られ落ち着いて食事ができる	食卓等の配置換えとソファの設置、(F) トイレカーテン購入、蛍光灯を増設	職員や利用者に説明を行い、落ち着いた食事が実現
	特養 7	色々な物品があり何をする場所か分からない	ゆったりとくつろげる環境にする	机やソファで居場所をつくる。(F) おやつ提供、かける音楽を職員で相談	この場所を選択する利用者が増えた
廊下	特養 6、7	利用者や家族がくつろげる場所がない	プライバシーのある空間と和風の雰囲気居場所	ロールカーテンでプライバシーに配慮したい場所と和風の雰囲気居場所。(F) ソファ増やす	和風の居場所は利用者が何時もいる。家族も活用
	特養 3、11	物が置かれて、利用者のために活用されない	多様な活動や居場所が選択できる	ミニ演奏会、アロマ、詩吟、家族との談話スペースとして家具配置の変更、作品の展示等	介護サポーターの協力で演奏会が定期的にできる
	特養 8、9	廊下の掲示物が雑多で、目的が分かりにくい	目にも楽しく、掲示物が理解しやすい	雑多な掲示物を取り外して、作品を楽しむ場にする。(F) 掲示方法や台紙などの工夫を継続	利用者の楽しみの場所になった。掲示物の方針を決める必要
浴室 脱衣室	特養 12、13	浴室と脱衣室のプライバシーがなく、寒い	安全とプライバシーがあり、気持ちよく入浴	縮尺図面でレイアウトを検討。(F) 浴室のレイアウト変更、カーテンでプライバシーに配慮。入浴時の移乗方法の説明書を作成して普及。	快適な入浴が可能に。入浴委員会と協力して進める。
	特養 2	浴室の洗面台が活用されていない	自分の力で、生活の楽しみが増える	洗面所に鏡設置、化粧水を置き、自分でできるように。(2) 対象者が亡くなれば中断	利用者には喜ばれたが、職員に浸透しなかった
	デイ 22	脱衣室の椅子やパーティションが危険	プライバシーを確保しながら安全に入浴	パーティションの固定、棚の危険箇所にカバー、カーテンの取り付け、滑り止めマットの設置	危険な部分は解消された。今後も様子を見て調整
トイレ	デイ 23、26	扉を開けると丸見えでプライバシーに欠ける	人目を気にせず、安全にトイレを使用できる	扉の内側にカーテン設置、使用状態が分かるプレートを見やすい位置に、利用者に周知を図る	利用者に喜ばれ、使用状況のプレートも活用されている
	小規模 17	トイレの場所を職員に聞く人が多い	利用者が迷わず行ける	トイレマークの位置を下げる、どこからでも見やすい位置や色、文字の大きさを工夫	トイレを探してウロウロする人が減った
ベランダ	特養 14	食堂前なのに不要品が置かれて汚く見える	季節を感じられるふれあいの場	花を植え、利用者やご家族に伝え、散歩や水やりを楽しんでもらう	ベランダを見て、きれいな、散歩がしたい等の声上がる
	特養 4	夏の緑のカーテンに引き続き楽しめるように	花や球根を植え、見て楽しむ空間を作る	台を設置して、ゴーヤを植えた鉢に花を植え見やすくする	一緒に植える作業をレクリエーションにしたい
静養室	特養 10	殺風景なところで看取りをしている	安心して旅立ち、安心して送り出せる環境にする	ソファベッド、飾り棚を設置。好きな花や思い出の品を置けるように。(F) 環境は維持	2名の方を家族と職員と一緒に看とることができた
居室	老健 1	ベッドとタンスしかなく、殺風景	刺激があり、自立した生活が送れるような環境	手作りのタピストリー、家族写真、ご本人が色塗りをしたカレンダーを飾る。(F) 利用者が入院	退院後の様子を見ている。

\*1 (F) はフォローアップ研修時の取り組み



表 3 施設環境づくり研修の実践事例の内容と活用状況（２）

場所	事例 No	課 題	環境づくりの目標	環境づくりの内容* <sup>1</sup>	環境づくりの活用
デイ ルーム	デイ 18、20 30	くつろげる場に欠ける	心地よくくつろげる場にする	テレビや家具を移動して、一人でいられる席、外を眺められる席など、居場所の選択を可能に。(F)壁紙交換、収納扉を交換の予定	自主的な過ごし方が可能になった。家庭的雰囲気になり、落ち着いて過ごせる
	デイ 19、31	活動がしにくい	活動しやすい場にする	本棚の目隠しを外して自分で選べるように。作業台や必要な物品を入れる場所を確保する	作業に集中できる。自分で本を選ぶ人が増えた。
	デイ 24	杖が倒れそうで危険	椅子に杖置きを設置して、自分で出し入れができる	杖置きを作成。椅子の脚にテニスボールを履かせて移動がスムーズに。(F)杖置きを増やす	杖が倒れるのが減り、利用者にも定着して、活用される
	デイ 21、27、 29	ものが落ちたり、つまづく危険がある	安全な環境に整える	不要品を処分して、統一のある収納を行う。電気器具の配線を整理する。家具の置き方を安全なように工夫する	片づけたことで、その状態を維持できるようになった。環境づくりを次の職員に引き継ぐ。
	デイ 25、28	ベッドで落ち着いて休息できない	プライバシーを確保して、心地よく休める環境	ベッドの周辺を整理、特に音の出るものを離す。(F) ベッド周辺にカーテンを設置	プライバシーが確保され、利用者に好評。カーテンによる死角を、職員が配慮する必要
	デイ 16、19	出入り口が使いにくい	朝夕の身支度がスムーズにできる	ハンガーラックや持ち物を整理。(F) 送迎の号車ごとに連絡ノートの棚を整理	自分の持ち物の認識ができる人が増えた。業務がスムーズに

\* 1 (F) はフォローアップ研修時の取り組み

からの工夫もあわせて行われ、そのことが次に述べる利用者による活用につながっていると思われる。

### （３）新たな環境の活用の状況

「環境づくり振り返りシート」には、以下のような利用者による活用の様子が記された。

①落ち着いた食事が可能になった、②利用者同士や家族とくつろぐ機会が増えた、③居場所や活動の選択ができるようになった、④廊下の展示物、音楽会、バラダの花など楽しみが増えた、⑤入浴、排泄、静養時のプライバシーが確保された、⑥趣味活動や読書などの活動を自主的に選び、集中できるようになった、⑦トイレの位置、持ち物の置き場所などが分かりやすくなり混雑が減った、⑧落ち着いた静養室で家族と職員が協力して看取りが行えた、⑨杖置きの設置や不要品が整理され、安全に活動できるようになった、⑩棚や物品の整理整頓が行わ、業務が円滑になったといった活用状況が報告された。ただし、２事例に関しては対象者の入院や環境づくりが職員に浸透しなかったために、フォローアップ研修時には中断されていた。

以上のような中断事例を除き、29 事例では環境づくりは利用者幅広い効果をもたらしていることが明らかになった。

### 3. 認知症高齢者への環境支援指針（PEAP 日本版3）に基づく環境づくり前後の変化

「環境づくり振り返りシート」に報告された 31 事例の環境づくり前後の PEAP の変化を図 1 に示した。環境づくりを実践した場所について、PEAP の 8 次元からみて環境支援がされている、または欠けているかについて評価した事例数を示した。

環境づくり前は 1 事例を除くとすべて環境支援が欠けているという評価である。「安全と安心」、「環境における刺激の質と調整」の次元の環境支援の不足に指摘が多いが、8 次元すべてについて環境支援の不足が指摘された。

環境づくり後にはすべて肯定的な評価に変わり、「環境における刺激の質と調整」、「安全と安心」、「自己選択」、「機能的な能力」、「ふれあいの促進」の次元において環境支援がなされているとの指摘が多いが、8 次元すべてについて改善が見られた。

以上のように、環境づくり実践により、施設の環境が認知症高齢者にふさわしく改善されたことが PEAP の次元からも把握できた。

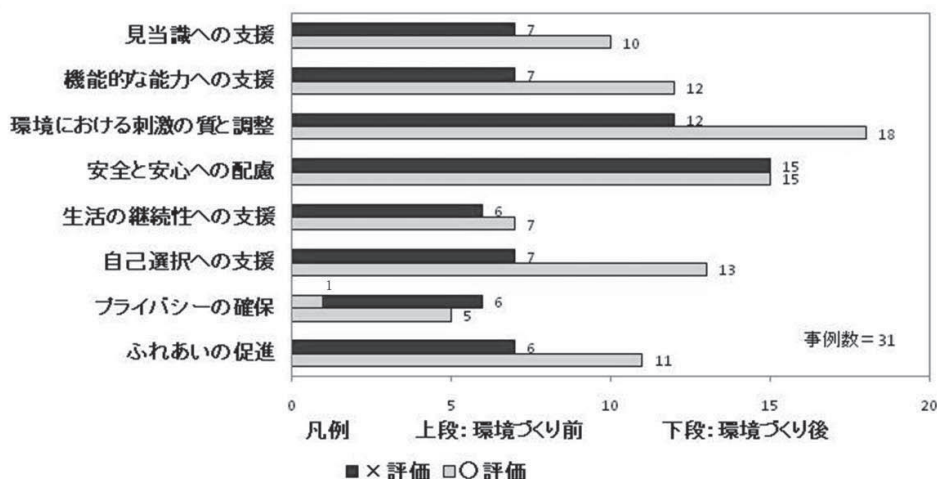


図1 「認知症高齢者への環境支援指針 PEAP」による環境づくり前後の評価

### 4. 高齢者の行動の環境づくり後の変化

ステップ6およびフォローアップ研修では、環境づくりを行った場所を利用する高齢者を選び、「利用者への環境づくりの効果表」を用いて、行動の変化を記入した。対象者や人数に関して統制を行っていないので、ステップ6では19名、フォローアップ研修では13名の行動変化が把握された。ステップ6終了後の10項目の行動に関して、「大変そう思う」と「まあそう思う」に該当する人数を特養・老健とデイのグループに分けて図2に示した。

要介護度がやや低いデイ利用者のほうが、全般的に効果が高く表れた。「落ち着いて過ごすようになる」、「居場所を選択して過ごすようになる」、「身の回りの動作でできることが増えた」、「なじみの関係が増えた」、「明るく元気になった」などの効果が観察された。

特養・老健利用者でも、「落ち着いて過ごすようになる」、「居場所を選択して過ごすように

なる」、「明るく元気になった」に効果が表れた。人数はそれほど多くはないが、「アクティビティへの参加が増えた」や「居室にその人らしさが感じられる」にも効果が認められた。

この研修では、研修参加者の選択に任せた形で高齢者の行動への影響をとらえたが、生活の落ち着きや活性化に環境づくりが効果をもたらしていることが示唆された。

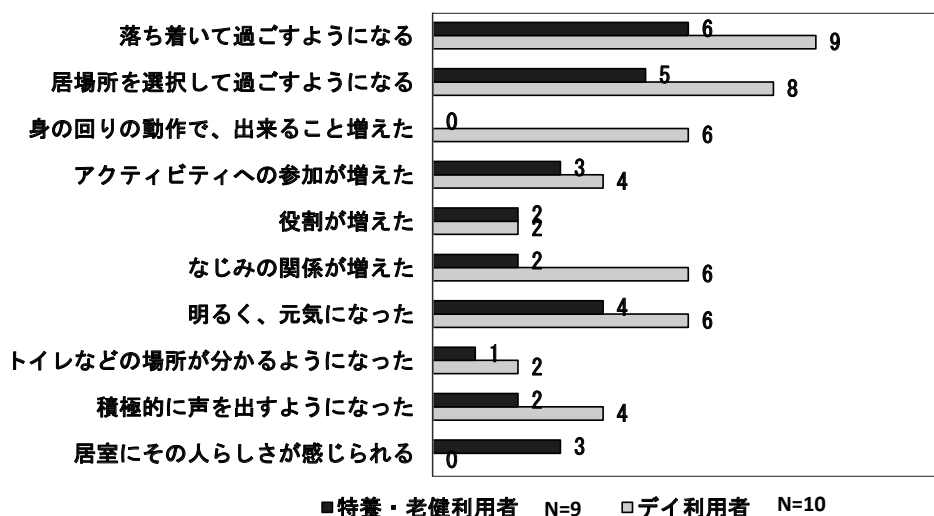


図2 施設環境づくり後の利用者の変化

## 5. 施設環境づくり研修への自己評価

フォローアップ研修が終了した13名に、施設環境づくり研修に関する自己評価と環境づくり継続の意向の調査を行った。「かなりできた」と「ややできた」の合計を見ると、「認知症ケアと環境への理解」、「認知症ケアと環境についての知識の習得」、「利用者の立場に立った環境づくりの視点」については100%であった。「キャプション評価法にもとづく環境改善の提案」、「環境づくりが利用者に及ぼす影響への理解」、「環境をケアに活かすスキルの習得」は90%台であった。「環境づくりを他の職員に伝える力」が69%、「環境を活かしたケアプランの作成力」は38%に留まった(図3)。

自施設での環境づくりの継続については、80%が既に継続しており、残りも取り組みたいと回答した(図4)。

この調査表の自由記述には、「他施設の積極的な取り組みに刺激を受けた」、「施設のスタッフを巻き込んで継続していきたい」、「研修に参加しなかったスタッフもケアと環境への気づきが増え、変わった」、「これからもスタッフを研修に送り、継続していきたい」等の記述が見られた。

以上のように参加者の自己評価では、6ヶ月間施設外研修と自施設での実践を連動させたことにより、ケアと環境に関する知識やスキルの習得のみでなく、環境づくりの影響にまで関心を広げ、参加者同士が刺激を受けながら研修の効果が上がったことが示された。

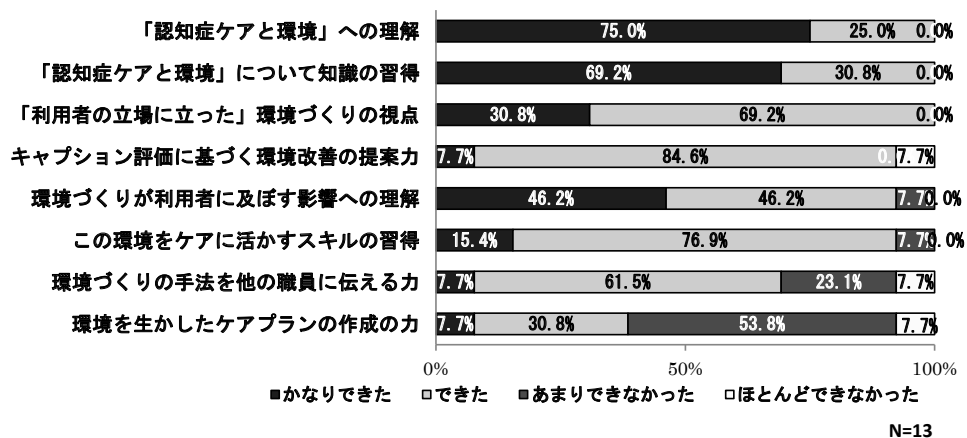


図3 施設環境づくり研修に対する自己評価（フォローアップ研修後）

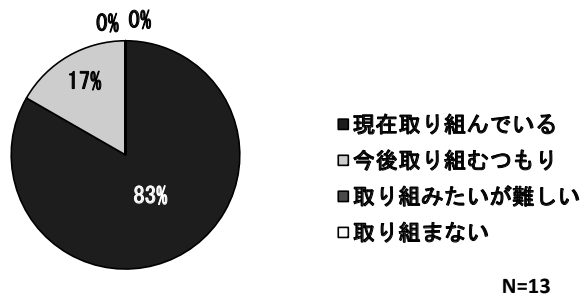


図4 自施設の環境づくりへの意向（フォローアップ研修後）

## IV. 考察と課題

### 1. 施設環境づくり研修のロジスティックモデル

科学的根拠にもとづく実践プログラム開発の手法のひとつであるロジスティックモデルに沿って、施設環境づくり研修を整理し、それぞれのプロセスでの効果や課題を明らかにする（図5）。ロジスティックモデルとは、プログラムの実施に投入される資源、活動内容やそこから生じる結果や成果の関係を示す図である。

本研修の資源（Inputs）として位置づけられるのは、「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」、環境づくり支援専門組織、介護人材研修機関と参加者である。参加者は受け身の存在ではなく、お互いに刺激を受け合い、意欲を高めたことが参加者の自由記述に示された。研修参加者とともに施設管理者、一般職員、利用者、利用者家族、ボランティアも重要な資源であり、円滑な環境づくりには協力が欠かせない。前述したように、環境づくりのプロセスで一般職員の協力を受けた事例も多く、新たな環境の活用利用者や利用者家族、ボランティアに働きかけたことも報告されている。

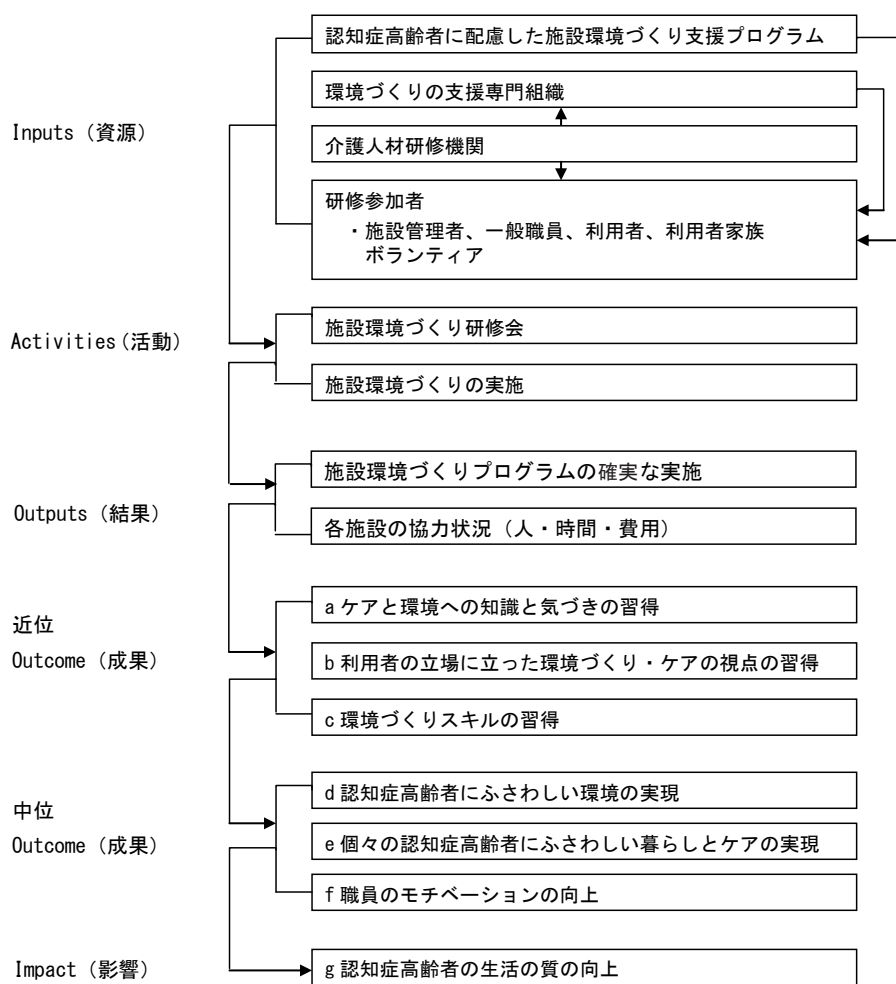


図5 施設環境づくり研修のロジスティックモデル

本研修の活動（Activities）は、施設環境づくり研修会と自施設で行われた環境づくり実践である。そこから直接生じる結果（Output）のひとつが施設環境づくりプログラムの内容に沿った確実な実施である。今回は参加者全員が同じ講義や演習を行った点で、個別の施設内で行われる研修より平準化されたといえる。施設の協力状況も結果のひとつであるが、参加者の主観的評価では、フォローアップ研修参加者の90%以上が施設職員や管理者の協力があつたとしている。介護人材研修機関から、施設管理者への事前説明文書が活かされたと思われる。施設の中での実践時間数や管理者・職員からの具体的な協力内容について、今後明らかにする必要がある。

近位の成果（Outcome）として、a ケアと環境への知識と気づきの習得、b 利用者の立場に立った環境づくりとケアの視点の習得、c 環境づくりスキルの習得が上げられる。これらについては、フォローアップ研修修了者の自己評価では、ほぼ全員が「かなりできた」と「まあまあで



きた」のいずれかを回答しており、高い達成率であるといえる。

中位の成果として、d 認知症に相応しい環境の実現に関しては、環境づくり前にはPEAPの8次元すべてに課題があることが指摘されていたが、環境づくり後にはそれらが解消してすべての次元で環境支援がなされていることが示された。e 個々の認知症者に相応しい暮らしとケアの実現に関して、物理的環境と合わせてケア的環境の工夫も行われていることが把握され、その結果落ち着いた暮らしや過ごし方の選択など、多くの側面で利用者のくらしが豊になったことが示された。また、f 職員のモチベーションに関しては、環境づくり継続への意向が100%であること、自由記述の中で研修参加者のみならず職員全体の気づきの高まりも報告されている。以上のように、中位の成果の中で環境の改善効果がとくに明確となったが、ケアや暮らし、さらには職員のモチベーションへの波及効果も示されているといえる。

最終的な目標である利用者への影響（Impact）については、環境づくりした場所を利用する高齢者を選んで「利用者への環境づくりの効果の調査表」を用いて観察を行った結果、生活の落ち着きや活性化に環境づくりの効果がみられることが示唆された。効果をより明確にするためには研修参加者への負担に配慮しつつ、高齢者への影響のさらなる把握が必要である。

以上のように、施設環境づくり地域連続型研修のロジスティックモデルは、個々の施設における環境づくり研修とほぼ同様の形となった<sup>10)</sup>。研修の形態に関係なく、共通のロジスティックモデルでプロセスや効果の説明が可能であるといえる。

## 2. 施設環境づくり研修の課題

### （1）科学的根拠に基づく実践（EBP）を視野に入れた研修の実施

一般的に研修には新しい知識やスキルの習得への期待が大きいですが、認知症の新たなケアの実現に向けた研修では、プログラムに沿って行った実践によりどのような効果が認知症高齢者へもたらされたかを確認できることが大切である。研修参加者の負担軽減に配慮しつつ、実践の効果を確認できるように研修を充実させることが大切である。

### （2）物理的環境と社会的環境を視野に入れた研修

施設的环境とケアの向上に欠かせない、物理的環境・社会的環境・運営的環境に対して、限られた期間で現場の介護スタッフが働きかけることができるのは、物理的環境と社会的環境である。今回の研修でも、職員間で新たな環境を活かす工夫をしたり、ボランティアの活用への取り組みなどがみられた。とくにフォローアップ研修では、利用者の様子を見ながら新たな環境の調整を行うとともに、それを活かすための社会的環境の工夫にも力を入れることが大切である。

### （3）環境づくりの知識やスキルの職員間での共有

環境づくり研修の自己評価で、評価がやや低めであったのが環境づくりの手法やスキルを他の職員へ伝えることである。本格的に行うには、施設内研修として人材育成手法の研修が必要と思われる。また、受け入れる施設の土壌も問題となる。

限られた時間の施設環境づくり研修のなかで、施設内での伝達研修の事例や環境づくり実践マニュアル<sup>5)</sup>や環境づくりCD<sup>11)</sup>を今以上に活用して、交代勤務の多い施設内で知識や成果を

共有できる方法を伝えていくことが大切である。それによって、各施設で環境づくりの継続が可能になると考えられる。

#### (4) 地域連続型研修の意義

この地域連続型研修を実施するのは、今回で2回目である。個々の施設における環境づくり研修に比べると、地域連続型研修では多様な種類の施設職員が、互いに刺激し合いながら、多様性のある豊かな環境づくり実践を体験することが可能となる。わが国のケア環境は、在宅、デイサービス、入所施設などによって環境条件が大きく異なり、それが利用する認知症高齢者に混乱をもたらす場合も多い。A区というひとつの基礎自治体のなかで、共通した理念にもとづく環境づくりが実践され普及していくことは、地域包括ケアのもと地域のなかの多様な介護資源を活用しながら生活することを求められる認知症高齢者に、好ましい影響をもたらすであろう。

## 文献

---

- 1) 厚生労働省老健局 (2006) 「2015年の高齢者介護」－高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて。
- 2) 厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチーム (2012) 今後の認知症施策の方向性について。
- 3) 認知症介護研究・研修東京センター (2012) 平成23年度厚生労働省老人保健増進等事業「認知症介護実践者等養成研修の平準化に関する検討」報告書、1-189。
- 4) 佐藤弥生、勅使河原隆行 (2008) 日本における認知症ケアの人材育成の現状と課題、Journal of health & social services, No.6, 43-62。
- 5) 児玉桂子、古賀誉章、沼田恭子ほか (2010) PEAP にもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル、中央法規、1-147。
- 6) 児玉桂子、古賀誉章、沼田恭子ほか (2009) 従来型特養のユニット化改修支援プログラム－マザアス東久留米での試み、地域ケアリング、Vol.11, No.14, 10-19。
- 7) 沼田恭子、児玉桂子、古賀誉章ほか (2011) PEAP の視点でケアと暮らしを変える－、練馬区立富士見台特別養護老人ホームにおける実践、地域ケアリング、Vol.13, No.1, 18-31
- 8) 古賀誉章 (2011) 施設環境づくりプログラムの多様な展開、地域ケアリング、Vol.18, No.8, 13-22。
- 9) 児玉桂子、古賀誉章、沼田恭子ほか (2011) 認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラムの全国レベルでの普及を目的とした実践研究、日本社会事業大学社会事業研究所紀要第57集、167-177。
- 10) 廣瀬圭子、児玉桂子、大島千帆ほか (2011) 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」の効果的実践モデルの構築－プログラム評価理論および方法論の適用－、

日本社会事業大学社会事業研究所紀要第 58 集、109-123.

- 11) 児玉桂子、古賀誉章、沼田恭子ほか（2010）認知症高齢者に配慮した施設環境づくり実践マニュアル（CD）、日本社会事業大学.

## 謝辞

本研修の主催者である介護人材研修組織、研修参加者と所属施設の皆さまの熱意と研修成果の発表への同意に対して、深く感謝を申し上げます。